

口承文芸理論の動向

— 国際学会・理論委員会の

活動について —

竹原 威 滋

国際口承文芸学会の理論委員会は、ヘルシンキ大会（一九七四年）において、会長のラウリ・ホンコ教授の呼びかけによって設置された。その後、一九七九年三月末の四日間、ブダペスト大学民俗学研究所の招請によってハンガリーのヴィンシェグラードにおいて理論委員会の研究集会が開かれた。参加者約三十名の小さな集まりであるが、さまざまなテーマと方法論について発表と討論が活発に行なわれた。⁽¹⁾

アーンゲス・コヴァチュは一九五三年来、携わっているハンガリーの昔話目録の作成について報告した。一万話の資料がA T番号によって分類され、現在までに愚か村話^{ばなし}、法螺話、形式話、動物昔話の部分が完了している。全体で十の部分から成るこの目録は早ければ一九八二年にFFC『民俗学者連盟通信』（ヘルシンキ）にドイツ語で刊行予定とのことである。ルッツ・レーリヒは小咄^{ジョーク}研究の問題を新しい着想と豊富な例証・挿絵を持って語り、イムレ・カトナスも二十五年間自ら集めた政治的な小咄の社会学的研究を発表した。ユハ・ペンティケイネンはカレリア地方の語り手マリア・タカ

ロの生活史と世界観について文化人類学的考察を加えた。オールドジフ・シロヴァトカは散文伝承の比較において民族的特徴を理論的モデルを示して論じた。ガーボル・ヴァルジャシュはプロップの方法論をニューカレドニアの民話と神話に適用して考察した。彼の学位論文は全オセアニアの資料を形態論的に分析したものになるという。そのほか、心理学的研究やテクストコンテクスト研究などが発表された。

このように、報告は、研究対象も研究方法も多岐にわたるものであった。そこで、エジンバラ大会（一九七九年八月中旬開催）においては、あらかじめ小論文集『口承文芸理論における現代の諸傾向』⁽²⁾を発行し、それに基づいて円卓討論をすることに決定した。次のような十三の題目が理論委員会委員（括弧内）に割り当てられた。——一、目録と資料館（レーリヒ）。二、野外調査（ペンティケイネン）。三、テクスト、コンテクスト及び環境（ホンコ）。四、文学の理論と民間伝承の理論（フォイクト）。五、民間伝承の世界観——觀念形態と民間伝承（ペンティケイネン）。六、構造主義と構造主義以後（フォイクト）。七、伝達の理論——語りの民族誌学（パウマン）。八、比較研究における現代の諸傾向（フォイクト）。九、ジャンル理論（ホンコ）。十、主題とモチーフ（レーリヒ）。十一、事典類（レーリヒ）。十二、漫画、広告、大衆論（レーリヒ）。十三、民間伝承の内的外的研究法（ペンティケイネン）。⁽³⁾こうしてできた小冊子はエジンバラ大会において参加者に配布されたが、ここでは紙数の許す限り、その報告を興味ある項目や啓発的な内容を中心に紹介してみたい。

資料館

民俗資料館の活動範囲は近年ますます広くなり、複雑

なものになってきている。現代の採集者は本文や旋律ばかりでなく本文に関する資料、レコード、写真、そのほか絵入りの資料、新聞の切り抜き、磁気テープ、スライド等を収集している。また、収集対象もすたれつつある伝統的な伝承ばかりでなく、現代の民間伝承にも及んでいる。従って資料館には自伝風言行録、うわさ、非伝承的な当今の伝説、小咄、個人的体験談などが保管されつつある。館員たちは収集活動や野外調査の組織化、資料の目録化、検索システムの作製、資料の刊行など従来の仕事のほかに、一般へのサービス業務もしなければならぬ。資料保管や検索利用のためコンピュータの使用など近代化が行なわれつつあるが、またさまざまな問題も生じている。館員たちの直面しているこのような問題についての国際的な情報交換の場が是非とも必要である。

口承文芸の索引 民間伝承の野外調査が拡大するにつれ、近年索引化それ自身も変わりつつある。また譬え話や逸話や笑話・小咄についての独自の索引も作成されている。一方、過去の索引に対する鋭い批判があるが、索引は依然として口承文芸研究の基礎文献となっており、国際比較研究の土台ともなっている。ところで、オールネットンプソンの話型索引を非ヨーロッパの諸民族に適用する場合、さまざまな問題が生じてくることは衆知の事実である。だが、その矛盾の出でくる根本的な理由は別のところにある。つまり、話型索引作成の前提として、昔話は安定した復元力のある話型に根ざして語られるという考えがあるからである。しかし、実際には固定した話型と同じくらいしばしば、混交した話が採集されている。同じような矛盾はトンプソンのモティーフ索引についても言えることである。そこでハーバート・ハルバートやリンダ・デークなどアメリカの民族学者たちによって、モティーフ索引を現代に即応する

ものにする計画がなされている。ニューファンドランド大学民俗学研究所がその活動のセンターになっており、国際的な協力を呼びかけている。伝説の索引についても今まで多くの試み(例えば、EFC 122, 123, 175, 182)がなされているが、学会の伝説委員会が国際的な伝説索引のガイドラインが作られ、各国の伝説索引の発展にわく組みを与えることになった(*Acta Ethnographica* 13, 1964)。このガイドラインに沿って『ドイツ死者伝説目録』がミュラーとレリーによって作成された。またグレンジャーはアリゾナの鉱山伝説目録(EFC 218)を刊行した。

テクストIIコンテクストII環境 民間伝承のテクスト(本文)が、諺であれ、伝説であれ、昔話であれ、もしコンテクストの(II本文に関する)情報を共に得ていなければ、またテクストが社会的文化的環境の中に据えられていなければ、無意味であるといっても過言ではないだろう。コンテクストの情報は単なるテクストの解釈のためにあるのではなく、テクストとコンテクストと環境は民謡や民話の生成過程において深くかかわっているのである。ここで社会言語学の「語りの民族誌学派」やダン・ペンIIアモスによって提唱された「コンテクスト民俗学」を挙げるまでもなく、コンテクストにおける口承文芸研究は今日では世界的な傾向になっている。それではコンテクストの情報とは何か? それは調査手法上、具体的に「テクスト」収集の際の状況、被調査者の生活とその特別な背景、被調査者に伝承を教えた人、収集された資料の起源、以前に(本人また他人が)話し、歌ったものの被調査者の復元の仕方、調査項目の意味についての被調査者の論評などの基礎的データを含むものであろう。もし、信頼すべき実演の観察が可能なら、実演者と観衆の行動についての完全な記録や視聴覚記録(写真、映画、ヴィ

デオ)も可能となろう。リチャード・パウマンは最近、六項目のコンテキストについてのチェック・リストを調査者に勧めている。(1)意味のコンテキスト(調査項目についての共同体構成員の平均的な解釈は何か?) (2)社会制度上のコンテキスト(それは文化にどこで適合しているか?) (3)文化領域上のコンテキスト(それは口承文芸の他のジャンルとどのように関係しているか?) (4)社会的土台(それはどんな階層の人々に属しているか?) (5)個人的なコンテキスト(それは被調査者の生活とどのように適合しているか?) (6)状況のコンテキスト(それは社会的状況にどのように役立っているか?) もちろんこの六つのコンテキストは部分的には互いに重なりあっているであろう。

比較研究 伝統的な研究法、つまり文献学的手法による比較研究は伝説の分野で行なわれている。例えばベツォルト編の『伝説の比較研究』(ダルムシュタット・一九六九)。また、ジルムンスキーは類型論的手法により英雄叙事詩を考察している。プロップを初めとする形態学的研究は比較研究の新しい可能性を提供している。例えばブレモンの『物語りの論理』(パリ・一九七三)。レヴィーロストロースの構造主義的神話研究は比較を容易になしうるであろうが、いくらかの理論的所見を除いては、口承文芸に関する比較研究は現れていない。また人類学で一般に行なわれている文化相互間の比較研究は口承文芸研究の分野に及んでいない。コルビーとその協力者は一般面会調査法において昔話における主題の比較研究を始めた。マランダによるジャンル・モデルの比較もまた口承文芸研究に目新しさを提供している。話型の個別研究や個々のモチーフの研究は近年、すっかり低調になっているが、他方、物語詩の研究においては、話型索引化やジャンル比較などが活発になっている。今後

の研究の傾向としては、非ヨーロッパの研究が増大し、また受容理論を援用した社会学的研究が、口承文芸研究の一翼を担うであろう。さらに比較様式論やジャンル比較研究が疑いもなく盛んになるであろう。

ジャンル理論 昔話、伝説、神話、逸話などジャンル用語は特定の伝承社会からみれば、余りにも一般的で、不正確なものである。純粹なジャンルというものはめったに存在しない。ジャンルの定義は他のジャンルから区別できるように、ある決った特徴や基準を強調している。従って現実のジャンルはこのようなすべての特徴を備えているわけではない。例えば、リンダ・デアークはテープ録音データに基づいて次のように結論づけている。伝説は信じられていないが、話の進行に従って聞き手に、さまざまに変化する幾通りかの反応を呼び起こす。このように、従来の伝説の定義は通じなくなっている。そういうわけだから、口承文芸のさまざまなジャンルをそれぞれ孤立したものとみなさず、文化伝達の異なった諸経路の一つの体系とみなすべきであろう。それでは種々なジャンルはいつ、どのように何を伝達するのか? 死を例にとってみよう。ある共同体は構成員の死、埋葬式、法事に関して種々のジャンルを使い分ける。諺、民間信仰、警告的な伝説、哀歌などが、儀式やそのほか文化慣習に従って演ぜられる。これらのジャンルはすべて死について何か意義あることを表現しているが、ほかのジャンルと同じ事柄や同じ仕方である必要はない。口承文芸の伝承者はそのジャンルのメッセージに関心があるのであって、ジャンルそのものに関心があるわけではない。ところで、さし迫った課題は社会の進展とのかかわりでジャンルとジャンル体系の変遷を研究することであろう。歴史的にみると、ある伝承、ないしジャンルは全く消滅してしま

か、ある社会ではすたれるが、別の社会で（同じ機能が異なる機能において）生き続ける。その原因は普通、ジャンルそれ自身の中にみいだされるのでなく、社会的経済的構造の変化の中にみいだされる。現代においては、田舎の人口減少や農業の機械化とマス・メディアの発達によって伝統的なジャンルはその社会的土台を失ってきつつあり、それに代って「短かき、個人的なジャンル」、例えば、回顧話、年代記風の話、滑稽話などが盛んになってきている。

主題とモチーフ　話型索引や、モチーフ索引の根拠となっている話型、類話、モチーフといった概念は何ら誤りのないドグマというわけではない。アールネイトンプソンの体系は歴史地理的研究法の原理としっかり結びついている。この研究法は、互いに独立した異なる話型の存在を前提にしており、しかもその話型の地理的起源と伝播が原理的には復元できると考えている。モチーフは話を形成する内容の最小単位であり、ある話型から別の話型へ自由に移動しうるものとみなされている。このような考えは伝承素材についての余りにも単純な見方である。最近ではこの種の研究は衰退している。もっともいくらかの個別研究、例えばベルグリーダーの『母が私を殺し、父が私を食べた』AT720（フライブルク・一九七九）などがあるが、類話の分布や地方話型の差異は提示できても、話型そのものの起源を突き止めることはできていない。それにもかかわらず、いくらかの話型は新しい研究の対象として人気を博している。例えば『ルムバルスティルツホン』AT500、『クビドとピンケ』AT425などは多くの研究者によっておもむきな研究法で扱われてきた。ここ数年、共時的な研究、特に心理学的解釈が歴史地理的研究に次ぐ地位を占めてきている。そして両研究法が同

じ一つの話型に適用されて、例えば伝説『アルプスの人形』に関する最近の研究（L・シュミット、M・リュティ、G・イスラー）のように、共時的研究法と通時的な研究法が互いに補いあうことも可能となっている。

事典類　クルト・ランケ編『昔話百科事典』全十二巻は現在、

第三巻（A—E）まで刊行されている。この事典は方法論、理論に関する項目（例えば昔話の年代決定、分類原理など）、基本的な概念に関する項目（抽象性、補正モチーフ、原型など）、話型やモチーフに関する項目（賢い百姓娘、悪魔と弁護士、黒い嫁と白い嫁など）を含んでおり、さらに、世界の国々や民族（エジプト、アルバニア、バスク、ベンガル、中国など）をカバーしており、また学者、収集家、語り手に関する項目（アールネ、アフナーシェフ、バリューズ、バイト、ホルテなど）もある。百科事典の見出し項目のリストは一九七六年に改訂三版が出ており、より完全な事典にすべく、世界の学者の助言や意見が求められている。事典そのものはドイツ語で書かれているとはいえ、項目執筆には世界中の学者が参加している（執筆予定者を含め約五百名）。ゲッティンゲン大学にある事典編集室は同時に国際的な口承文芸の資料センターになっており、執筆者にも必要な資料が送付されている。今後完結するまで二十年余かかる長期プロジェクトである。次に、伝説に関してはフライブルク大学においてレーリヒの指導のもとに主として超越的存在（妖怪）を扱った新しい伝説事典を計画中である。また、北欧民間伝承学会（NIF）では主に北欧の諸大学で学生指導用に使われる口承文芸用語辞典を計画している。辞典項目としては、例えば、逸話、寓話、伝説、昔話、原型、集成資料、叙事的法則、内容分析などが挙げられている。編者のホンコはその草案を世界の五十

人以上の研究者に送付し、その意見を求めている。同種の辞典としては既にH・ジュイスンの多数の言語を用いた術語辞典(エルサルム・一九七五)やL・ペドカーの『ヨーロッパ人類学・民間伝承辞典』(コペンハーゲン・一九六五)がある。ドイツではジャンル別の研究案内書がメッツラー叢書から出ている——昔話(リュスティ)、伝説(レリーヒ)、聖者伝(ローゼンフェルト)、笑話(ストラスナー)、寓話(ライプフリード)、逸話(グロテ)、諺(レリーヒ)。アメリカにおいてもダンダス、ブランヴァンド、ドーンソンなどによる基本的な案内書が刊行されている。大事典が未完結の現在においては小事典や参考図書は依然として欠くことのできないものである。例えば、キャサリン・M・ブリッグズの『イギリス昔話事典』(ロンドン・一九七〇)、エリザベト・フレンツェルの『世界文芸の諸モチーフ』(ストットガルト・一九七六)や『世界文芸の諸素材』(ストットガルト・一九六二)。さらにB・ホルベックとI・ピエの『伝説上の動物と人物』(コペンハーゲン・一九六七)は広く一般大衆向けに書かれているが、口承文芸研究者にとっても有用な事典であろう。

漫画・広告・大衆論 現代の民俗学者は新聞、テレビ、ラジオなどのマス・メディアが民間伝承の普及に大きな役割を果しているのに気づき始めている。特にある小咄がたちまちにして流行することなどがよい例であろう。大衆の読み物が今や、口承文芸研究の正当な対象になってきている。民俗学者は伝統的なジャンルの研究に加えて、現代流行している読み物も考察するようになった。伝統的な昔話と漫画の間の、主題や類型や機能の点での比較研究が行なわれている。漫画は伝統的な素材を目に見える形で大衆に提供し、それによって昔話の後継者になりつつある。昔話と漫画の共通点を挙

げると、両者とも異常なことや冒険を好み、また争いとその解決法も似ている。そのプロットは両者とも、話の発端は正常な状態があり、次にその秩序が乱され、再び正常な状態を回復するという構造になっている。また登場人物の性格付けも似ている。主人公は不滅であり、難局に現れ、助け手となる。悪漢は主人公の対極的機能を果す。そして最後には悪の力は必ず減ぼされる。もちろん漫画と昔話の間にもいくらかの相違点がある。昔話の筋は争いの最終的な解決に向って、まっしぐらに進む。一方、漫画はしばしば争いが果しなく続く。その理由は定期刊行物に連載されるといふ事情からも説明されよう。さて、広告産業は消費者に製品を宣伝するための新しい手段として、民間伝承に目を向けている。もちろんその場合、伝承を本来の環境から取り出して、自己の目的のために造り変える。例えばテレビ・コマーションに妖精やこびとが現われ、ある製品の価値について視聴者を啓蒙しようとする。ここでは妖精たちは製品の魔術的な保証人になっている。電子レンジの宣伝を例に取ろう。幸せそうな顧客が「シンデレラよ、さようなら」と言う。つまり消費者は、手を汚す台所仕事を解放され、王子と幸せな時を持つことができるわけだ。昔話と同様に話の発端にはしばしば不均衡な状況や欠除があり、この欠除が魔法の人物に与えられる贈り物(つまり、宣伝された製品)により、問題が解決し、永遠の幸せが約束されるのである。このように広告はしばしば昔話と同じ基本的な構造を持っている。もちろん民俗学者は民間伝承が市場化され、誤用されるならば、それに警鐘を鳴らす役目を担わなければならないだろう。

注

1 ゲッティンゲンのライナー・ヴェーゼ氏の報告による [Fr-

- buta 21, Band (1980), S. 94 f.]
- 2 *Current Trends in Folk Narrative Theory, the English version* (thanks to Don J. Ward). Edited by Lutz Rohrich Freiburg 1979.
- 3 エジソンラ大会については小沢俊夫氏の報告を参照頂きたい
『本誌、第三号(1980)五七頁以下』。
- 4 この事典についての詳しい報告は拙稿、K・ランケ編『メルヘン百科事典』の周辺「Seminarium 第二号(1980) 大阪市立大学セミナーウム刊行会」を参照頂きたい。尚、最近の口承文芸研究の動向を記したものと、拙稿、スイスにおける昔話研究の動向「昔話研究懇話会編『昔話—研究と資料—』第七号(昭和五四年) 三弥井書店」も合わせて参照頂きたい。

(たけはら たけしげ・奈良教育大学)

〔新入会員〕

| | | |
|-------|--------------------|------------------------------------|
| 石川教張 | 〒166 | 杉並区梅里1-1-12 |
| 磯沼重治 | 〒193 | 八王子市小比企町1617 |
| 加村忠廣 | 〒636 | 奈良県生駒郡三郷町勢野2764-1 椿マンション第2棟101号 |
| 小副川肇 | 〒870 ⁰¹ | 佐賀市高木瀬町大字高木1145 高木瀬西住宅5-14 |
| 小林成光 | 〒053 | 苫小牧市双葉町2-6-4 |
| 重信幸彦 | 〒189 | 東村山市青葉町3-36-11 |
| 園山暢子 | 〒112 | 文京区大塚2-4-8-908 |
| 中津芳太郎 | 〒644 | 御坊市湯川町丸山539-17 |
| 野添謙治 | 〒963 | 郡山市開成5-19-19 大山ビル1-403 |
| 藤井知明 | 〒450 | 名古屋市中区栄2-4-23 |
| 松原孝俊 | 〒813 | 福岡市東区千早6-1-842 |
| 渡辺恭子 | 〒226 | 横浜市緑区中山町151 |
| 渡辺宏末 | 〒226 | 横浜市緑区中山町151 |
| 枚浦勝 | 〒614 | 京都府八幡市男山長沢2-12 |